

1年生の広葉雑草

＜特徴＞

- 新播草地に多くみられる
- 越冬せずに種子によって増殖する
- 1年生雑草が増えやすくなる原因の例
 - ① 草地更新時に耕起ムラがある
 - ② ほ場内で不均一な播種
 - ③ 鎮圧不足で、発芽勢の揃いが悪い
 - ④ 5月中旬～6月下旬の播種
- 草地更新時に7月から9月上旬に播種することと、除草剤を2回使用することで、発生を抑えることができる
- 牧草よりも生育が早いいため、掃除刈りも有効

収量低下

嗜好性低下

成分注意

地下茎あり

選択性
除草剤なし

主な種類と見分けるポイント

＜シロザ＞

- アカザはシロザの亜種
- 葉の縁がギザギザしている
- 中心の新芽部分に赤い粉がついている

＜イヌタデ＞

- 茎が赤く、細長い葉
- 小さな赤紫色の花が密集するように咲く

＜アブラナ科（シロカラシやスカシタゴボウなど）＞

- 黄色い花が咲く
- 葉の縁がギザギザしている

＜オオバコ＞

- 丸い厚めの葉で縁が波打っている
- 穂状に花をつける



シロザ



イヌタデ



シロカラシ



オオバコ

草地や飼料利用する際の影響

雑草は生育が早く、牧草を覆ったり、多くの肥料を吸収したりします。その結果、牧草の生育が阻害され、弱い株となります。

1年生雑草は越冬せずに枯死するため、被害の影響はさほど大きくありません。しかし、種子が落ちてしまうと再び発生したり、裸地に他の雑草（ギシギシ類やタンポポ類など）が侵入したりすると被害が大きくなります。

早春にほ場を観察し、裸地が多いようであれば追播などを行い、牧草密度を高める管理が重要です。

越冬する1年生の広葉雑草（ナズナ、アメリカオニアザミ）

<ナズナ>

- 別名；ペンペン草
- 新播草地に多くみられる
- 越冬し、2年程度生存する
- 種子で増殖する
- 1年生雑草と同様に、草地更新時に除草剤を2回使用すると抑制できる

<アメリカオニアザミ>

- **放牧草地の強害雑草**
- 種子が裸地に侵入し発芽することで定着する
- 牛が食べず防除しないといつまでも残り続ける
- 高い牧草密度維持による発生予防が重要
- 刈り取りに弱いいため、発生した場合は年2回以上の掃除刈りで衰退させ、裸地に追播するなどの対策が有効

収量低下

嗜好性低下

成分注意

地下茎あり

選択性
除草剤なし

主な種類と見分けるポイント

<ナズナ>

- 小さな白い花が密集して咲く
- 葉がタンポポのように横に広がる（ロゼッタ状）

<アメリカオニアザミ>

- 茎にセイヨウトゲアザミ（24 ページ）より大きなとげが生えている
- 赤い花が咲き、花の下部が膨らんでいる
- セイヨウトゲアザミよりも、花が大きく色が濃い
- 種子に綿毛がついており、遠くまで飛来する



ナズナ



ロゼッタ状に広がる葉（ナズナ）

草地や飼料利用する際の影響

<ナズナ>

1年生の広葉雑草と同様に、①光と肥料の競合による牧草の生育抑制 ②枯死後の裸地増加による他強害雑草の侵入の影響があります。

サイレージに混入すると、嗜好性低下につながり、採食量が減少する可能性があります。

<アメリカオニアザミ>

アメリカオニアザミは採食されないため、株周辺の採食利用率の低下につながります。また、とげが牛体（特に乳房など）を傷つけてしまうため、複数回の掃除刈りでの対処が必要です。



アメリカオニアザミ

多年生の広葉雑草（エゾノギシギシ、セイヨウトゲアザミ、タンポポ）

〈エゾノギシギシ〉

- ・ 散布するスラリーや土中の種子により発芽
- ・ 落下する種子の量が多く（約1万粒/株）、土中で20年生存する
- ・ 中途半端に抜いても残った根から再び発生する
- ・ 肥料の重複散布によりpHが低下した部分でも発生が増加する
- ・ 除草剤の使用で十分に枯らさず対策が必要

〈セイヨウトゲアザミ〉

- ・ **放牧草地の強害雑草**
- ・ 種子と地下茎で増殖し、対策しないと何年も生存する
- ・ 他特徴は「アメリカオニアザミ」と同様（23ページ）

〈タンポポ〉

- ・ ほ場の裸地に侵入し増殖する
- ・ 種子が遠くまで飛来し、路肩のタンポポから侵入することもある

収量低下

嗜好性低下

成分注意

地下茎あり

選択性
除草剤なし

主な種類と見分けるポイント

〈エゾノギシギシ〉

- ・ 別名；大黄（ダイオウ）
- ・ 葉が大きい
- ・ 茎が強く、直立している

〈セイヨウトゲアザミ〉

- ・ 茎にとげが生えている
- ・ アメリカオニアザミよりも葉の色が明るい

〈タンポポ〉

- ・ 草丈が低く、葉がロゼッタ状に広がる
- ・ 種子に綿毛がある



エゾノギシギシ



セイヨウトゲアザミ

草地や飼料利用する際の影響と防除時の注意

〈エゾノギシギシ〉

生育が旺盛で大きな葉で牧草を覆うことと、増殖能力が非常に高いことが問題です。また、サイレージに混入すると嗜好性が低下します。

チフェンスルフロンメチル剤（商品名；ハーモニー75DF水和剤）などの選択性除草剤で防除することができます。しかし、マメ科牧草へ影響がある除草剤もあるので使用の際は注意が必要です。種子を落とさないよう、スポットで除草剤を使用するなど早期の対策が重要です。除草剤散布後に裸地が大きい場合は、追播を行い雑草の侵入を防ぐと再発を抑制できます。

〈セイヨウトゲアザミ〉

「アメリカオニアザミ」と同様です。23ページをご参照ください。

〈タンポポ〉

掃除刈りの効果はなく踏圧に強いいため、防除が難しい雑草です。裸地が大きくなってきたら、追播による牧草密度維持や5月上旬までの早春施肥が効果的です。